

## 男女共同参画推進委員会からの報告

男女共同参画推進委員会

### 第11回シンポジウム “未来を拓く社会からのメッセージ ～男女が共に生きる取組とは～”

3月11日に発生した東日本大震災による第91春季年会が中止となり、本企画シンポジウムも取り止めと決まった。本稿では、3月28日(月)に予定されていた企画案と講演概要について述べる。

本委員会は、男女共同参画社会の実現を目指して昨年までに10回のシンポジウムを開催するとともに数多くの提言を行ってきた。その成果として、また会員各位のご努力により日本化学会での男女共同参画は、支部活動も通して一緒に就いた感がある。本シンポジウムは、男女共同参画が進む企業組織での運営と実施経験を学び、今後の展望を共有することを第一目的とした。さらに、将来の化学界を牽引すると期待される院生、学部生の参加に焦点を絞り、将来の人生選択へのヒントとなる知識や価値観を、実社会で活躍する諸先輩から何うとして企画された。シンポジウムの全貌をご理解いただくため、ポスター(図1)を示し、講演者の要旨を簡単にご紹介させていただく。

基調講演は、板東文部科学省生涯学習政策局長にご依頼した。局長は「少子高齢化・人口減少、グローバル化など社会経済が大きく変化中、多様な人材を活かしていくことはますます重要になっている。多様性(ダイバーシティ)の推進は、新しい価値の創造やイノベーション創出にとっても不可欠であり、男女共

同参画は、その基本となる柱である」「女性の活躍の促進は、すべての人が生き生きとその能力を発揮できるような環境・風土を形成するものであり、我が国の現状や施策、多様な能力・視点が活かされる社会、組織の在り方について考える」とされ、(株)資生堂リサーチセンター石野氏は「リサーチセンターの研究員500名の約4割が女性で、男女比が45歳以下では1:1の現状にあり、“gender equal society”の実現は大きな課題であり、その実施例」を、NTT(株)河西氏は「『多様な人材』が『多様な働き方』を選択しつつ、一人ひとりが持てる能力を最大限発揮することによって、将来とも企業の競争力を維持・強化することを目的に、2008年に発足したダイバーシティ推進室の活動とご自分の経験や、社会や会社の状況」を、東京ガス(株)西村氏は「子育てをサポートする会社の制度を積極的に活用し、人生を豊かに彩る一要素である『仕事』と『子育て』のバランスを時々の状況によってコントロールし、生き活きと働いている仲間の実例」をご紹介下さるはずであった。三井化学(株)田中氏は「2006年4月に“女性社員登用推進チーム”が発足し、当時63名だった女性管理社員が115名に増加した成果(部長級2名、課長級20名)など」について、東京工業大学の林氏は「近年の企業と国公立大学での男女共同参画状況の違いを東工大の現状で示し、ご自身の体験に基づく女性研究者のマルチタスクの必要性」を、花王(株)座間氏

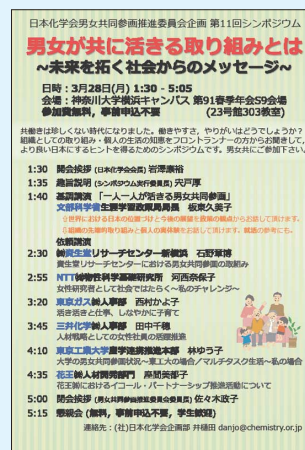


図1 第11回シンポジウムポスター

は「2000年から国内グループ会社を対象に推進している“イコール・パートナーシップ(EPS)推進”について」ご報告いただく予定であった。

### The IYC International Women's Networking Event, Breakfast Meeting, in Japan

今年は、“Chemistry-our life, our future”を統一テーマとする世界化学年(IYC2011: International Year of Chemistry)である。化学に対する社会の理解増進、若い世代の化学への興味喚起、創造的未來への化学者の熱意ある貢献への支援、女性の化学における活躍の場の支援を目的として、2008年の国際連合総会で決議され、世界各国が連動して化学に関する啓発・普及活動を行う年と決定された。国際純正・応用化学連合(IUPAC: International Union of Pure and Applied Chemistry)創立100年目、Marie Curie夫人のノーベル化学賞受賞から100年目の化学界にとって記念すべき節目の年

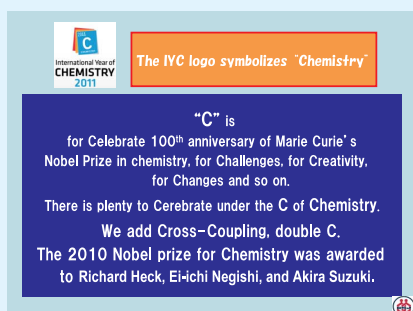


図2 “C”の意味は？

でもある。

世界の女性化学者の協調・結束を深めるために、“Women Sharing a Chemical Moment in Time: Breakfast Meeting”を、2011年1月18日に世界各国、各地域で同時刻に開催しようというメッセージがIUPAC, IYC委員会から届けられた。本委員会はこれに応えるべく検討を開始したが時間の制約があり、日本化学会の全女性会員への呼びかけは断念し、本委員会主催の小パーティを企画した。開催通知を、本会委員、日本化学会IYC委員会、世界化学年日本委員会事務局、(独法)科学技術振興機構「さきがけ」女性研究者などへ送り、参加をお願いした。

世界化学年IYC2011のロゴ「C」は、第一に“Chemistry”を表すとともに、Curie, Celebrate, Challenges, Creativity, Changesなどを象徴すると製作者は述べている。昨年2010年度のノーベル化学賞は、現在、医薬品をはじめとする多様な物質合成に活用されている「クロスカップリング反応」研究が評価され、リチャード・ヘック博士とともに日本の鈴木章博士と根岸英一博士に授与された。



写真1 サイエンストーク

委員長はロゴ「C」の意味に「Cross-Coupling Reaction」を加え、日本人二人の受賞、ダブル「C」を讃えるメッセージを世界に発信したいと発案し、ティーパーティでその趣旨(図2)を出席者に伝え好評を得た。また、日本科学未来館で科学コミュニケーター寺村たから氏が「クロスカップリング反応」について講演されていることを知り、パーティでのサイエンストークをお願いした(写真1)。出席者は、化学する楽しさと喜び、若手育成と化学の未来などについて語り合った。その成果の1つは、「化学経済」5月号の“世界化学年<特集>日本のマリー・キュリーを育てよう”となって刊行された。このイベントに協調参加した

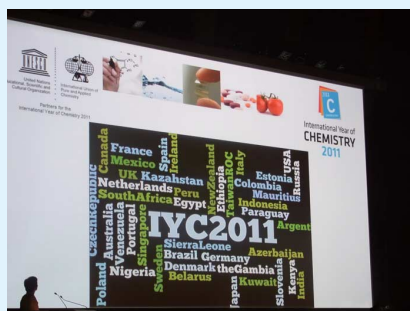


写真2 IYC オープニングセレモニー

国は37カ国(写真2)、約80地域であった。当日は、約30名が参加し主旨を祝った(写真3)。なお、5月13日相馬芳枝前委員長が、IUPACの世界化学年記念事業の1つとして提案された2011 IUPAC Distinguished Women in Chemistry/Chemical Engineering Awardのお一人に選出されたとの吉報が届いた。8月のプエルトリコでのIUPAC総会で受賞式典が予定されている。



写真3 当日の参加者

## おわりに

研究者の女性比は、13.0%とOECD最下位の日本であるが、日化女性学生会員比は19%強である。この趨勢は、男女共同参画が化学会をはじめとする多様な学術分野で常識になる日も近いと期待させる。ここに、化学研究者・技術者の社会貢献を再確認しつつ、日本化学会の明るい将来を展望し、女性化学者の一層の活躍を願い報告のまとめとする。

[男女共同参画推進委員会委員長 佐々木政子(東海大学名誉教授)・シンポジウム実行委員長 宍戸厚(東京工業大学)]